地元企業、演劇大道具作り

地元企業、演劇大道具作り

講師派遣 鉾田一高に協力

古くなった芝居の大道具の修繕に頭を悩ませていた県立鉾田一高（鉾田市鉾田）演劇部に、地元の建設業者が道具作りを伝授するという形で手を差し伸べた。高校生にとっては慣れていない「工具」の扱い方を教わりながら、ドア作りに挑戦し、建設業へのイメージも新たにした。

協力したのは、地元建設業の伊東建設（同市串挽、伊東久夫社長）。同演劇部の大道具の多くが10年以上経過し塗装を繰り返して使用している状況で、新しい道具を作るのにも専門知識がないために困っていることを知った同社が、地域貢献として講習会の開催を決めた。10月20日に開いた講習会には演劇部の1、2年生13人が参加。建設会社側は、専務で建設業の魅力を発信する出前授業を担当している伊東優考さん（7）が同校を訪れ、生徒たちの要望を踏まえてドアを製作した。

ドア作りに必要な工具であるインパクトドライバーの使い方の説明を受けた後、戸枠の作製に取り組んだ。生徒たちは慣れない作業に戸惑いながらも、楽しそうに作業に取り組み、ドアが完成すると、歓声を上げて喜んだ。

2年の吉岡胡桃（くるみ）さん（16）は「初めてのビス打ち作業が楽しかった。みんなで作った道具を自分たちの舞台で使えることがうれしい」と話し、自分たちが製作した大道具に満足感を浮かべた。さらに、「教えてくれた人たちが穏やかで楽しい雰囲気があり、建設業に対するイメージが変わった」と笑顔を見せた。

講師を担当した伊東さんは「ドアは生徒たちが運びやすいよう、軽さとコンパクトさを重視したデザインにした。生徒たちが工具に触れることで、ものづくりに興味を持ってもらいたい」と話した。（鶴岡宜規）



建設業者の指導を受けて大道具を作製する生徒たち＝鉾田市鉾田

茨城新聞　2026年11月11日（水）掲載